

て駐留した者の子孫で、人口は約3千人である。

ダグル語内部の方言的差異は小さい。莫力達瓦達斡爾族自治旗を中心としたものをブトハ(布特哈 Butkha)方言、チチハル市を中心としたものをチチハル(Tsitsikar)方言とよぶ。さらに、トダエワ(Б. X. Тодаева, 1960)は、ハイラル(海拉爾 Hailar)方言をたて、そこでは、*hに由来する語頭x音の消失を指摘している。方言間の差異の詳細については、今後の研究にまっところ大きい。

ダグル族は固有の文字をもたず、書記には、中国語やモンゴル語を用いる。書き言葉制定の試みとして、1950年代に、ロシア字に基づく正書法と読本が内蒙古で出版されたことがあるが、実施されるに至らなかった。エンフバトによる「達斡爾語記音符号」(1983)、『達漢小詞典』(1983)、および『達斡爾語読本』(1988)は、ローマ字アルファベット26文字を用いて、中国語の拼音(ピンイン)方式でダグル語を表記しようとする、新しい書き言葉の試みである。ダグル族の大部分は、周囲の中国語やモンゴル語、あるいは、新疆地方では、カザフ語との二重言語生活を送っている。

モンゴル諸語の中で、ダグル語は、他のいずれの諸言語、諸方言ともかけ離れた、いわゆる孤立的諸言語の1つに数えられる。この言語独自の特徴のうちには、他の現代諸方言ですでに失われた古風な特徴がみられることから、「ダグル人によって中世蒙古語が話されている」(N. Poppe, *Grammar of Written Mongolian*, Wiesbaden, 1954)といった俗説があるが、あたらない。ダグル語は、他の諸言語に劣らず、大規模な独自の音声変化や、満州語や中国語の影響による多くの改新変化を被っているからである。

ダグル語研究の歴史は新しく、また、利用できる資料も、最近まできわめて限られた状態にあった。この言語の音韻と文法の概要を初めて学界に紹介し、それ

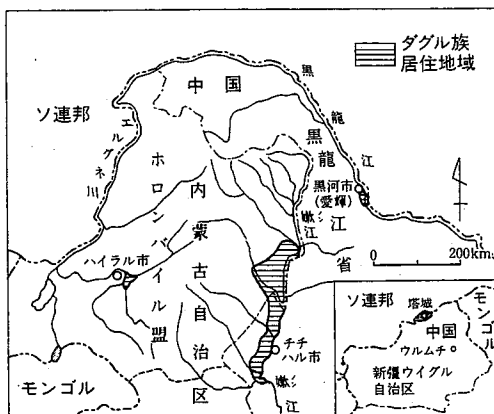
ダグル語 英 Dagur, 中 達斡爾(Dáwò'ěr),

露 дагурский язык

【概況】 モンゴル諸語の1つ。ダウル(Daur), ダフル(Dahur), ダホル(Dahor), などのよび方もある。漢字では、達斡爾のほか、達呼爾、達胡爾、達古爾などと表記される。いずれも、ダグル族の自称[dayur~daur]を写したものである。

ダグル族は、大部分が中国の東北地方に、一部が新疆地方に居住し、人口総数は、1982年の統計で94,014人。おもな居住地点は、内蒙古自治区の呼倫貝爾盟、黒龍江省の齊齊哈爾市周辺、さらに嫩江とその支流沿岸、および、新疆ウイグル自治区のチョチェク(塔城)県である(〈図〉参照)。このうち、呼倫貝爾盟の莫力達瓦達斡爾族自治旗と齊齊哈爾市の郊外地区に、もっとも人口が集中している。新疆のダグル族は、清朝のジュンガリア(Jungaria)征討軍として同地に遠征し

〈図〉 ダグル族主要分布地域



出典：『達斡爾族社会歴史調査』(1986)による。

までツングース系とみなされることもあったダグル語が、モンゴル系であることを立証したのは、1930年に出版されたポッペ(H. H. Ponne)の『ダグル方言』である。しかし、その後、半世紀にわたって、マーチン(S. E. Martin, 1961), カルジェンスキ(St. Kałużyński 1969, 1970)を除いて、めぼしい研究はなく、新しい研究の可能性が開かれたのは、1980年代に入ってからのものである。

特に、1980年には内蒙古大学蒙古語文研究所のスタッフによって、中国国内のモンゴル系諸言語、諸方言の組織的な言語調査が行なわれ、その成果として、約7千項目を含む語彙集『達斡爾語詞彙』(1984)、日常会話、民話、伝説、歌謡、諺、謎々等を含む口語資料集『達斡爾語話語材料』(1985)、および文法書『達斡爾語和蒙古語』(1988)が公刊されて、信頼できる資料が提供された。

【言語特徴の概観】 ダグル語には、現代の他の多くのモンゴル語諸方言で失われた、一連の古風な特徴が見いだされる。すでに述べたように、ダグル語が、ときに、「中世蒙古語」の状態にあるといわれるのは、この現象だけを一面的にとらえた表現である。

音声面の古風な特徴としては、次のものが目立つ。

1) 中世蒙古語にみられる語頭の無声摩擦音 h が、多くの場合、軟口蓋無声摩擦音 x として保持されている。これは、多くの現代語方言では失われた。

中世蒙古語	ダグル語	ハルハ・モンゴル語
harban	xarəb	arəb 「10」
hir	xir	ir 「刃」
hon	xōn	oŋ 「年」
hüker	xukur	üxür 「牛」

2) 中世蒙古語の a'u, e'ü という母音接続(hiatu)に対応して、多くの場合、二重母音の au, əu が現われる。他のほとんどの現代語方言では、長母音がこれに対応する。

中世蒙古語	ダグル語	ハルハ・モンゴル語
a'ula	aul	ūl 「山」
ja'un	džau	dzū 「100」
de'ü	dəu	dū 「弟妹」
se'ül	səulj	sūl 「尾」

他方、音声面での改新的な特徴としては、次のものが際立っている。

1) 母音体系が単純化して、ハルハ・モンゴル語等で区別されている4つの円唇母音(o, u, ö, ü)が、o, u の2つに融合した。

ハルハ・モンゴル語	ダグル語
xol	xol 「遠い」
xurū	xorō 「指」

xöl	kulj	「足」
xür-	kur-	「着く」

2) 第1音節で、ハルハ・モンゴル語等の円唇母音 o, u に対応して、しばしば wa が現われる。

ハルハ・モンゴル語 ダグル語

olöŋ	walən	「多数の」
dotör	dwatər	「内部」
gurüb	gwarbə	「3」
unt-	want-	「眠る」

この場合、語頭に唇子音 b があると、w はそれに吸収されて、母音 a だけが現われる。

ハルハ burxūŋ, ダグル barkən 「神, 仏」

3) 語末の二重母音が、多くの語で消失した。

蒙古文語形 ダグル語

noqaj	nogw	「犬」
melekej	mələg	「蛙」
qančuŋ	kantš	「袖」
qoɣulaŋ	xölj	「喉」
tangnaj	tannə	「顎」
malayaŋ	magel	「帽子」

最後の例では、音位転換も観察される。

malayaŋ → *malag → magel

4) 語中、語末の音節末の子音が、r 化する現象が目立つ。

蒙古文語形 ダグル語

tobči	tortš	「ボタン」
aɣta	art	「去勢馬」
keüked	kəkur	「子供」
ulus	olur	「人々」

5) 蒙古文語の喉子音 q に対して、摩擦音の x と閉鎖音の k が対応し、同様に、蒙古文語の k に対しても、x と k が対応している。

蒙古文語形 ダグル語

q	=x, k	
qabar	xamər	「鼻」
qori(n)	xorj	「20」
qaɣučin	kautšin	「古い」
qour	kor	「毒」
k	=x, k	
kedü(n)	xəd	「いくつ」
künd	xund	「重い」
kerem	kərem	「りす(栗鼠)」
küjten	kuitun	「寒い」

6) 第2音節以降の短母音の弱化、特に開音節の短母音の弱化、消失が顕著にみられる。

蒙古文語形 ダグル語

ama(n)	am	「口」
--------	----	-----

ere	ər	「男」
usu(n)	os	「水」
gölüge	gulgw	「小犬」

7) 子音の体系に、通常の発音に加えて、口蓋化音と円唇化音の合計3つの系列をもつ(後述)。

文法、形態面での、ダグル語の目立った特徴としては、次のものがある。

1) 名詞語幹末のいわゆる「不定の n」が失われ、格変化に際して、語幹末に n をもつ形とたない形との語幹交替がない。

モンゴル系諸語における「不定の n」は、一群の名詞において、格変化に際して、語幹末に n をもつ形とそれをもたない形とが交替する現象である。たとえば、ハルハ・モンゴル語では、次のように、属格、与・位格、奪格で、語幹末に子音 n が現われる。ダグル語では、こうした語幹の交替はすでに存在しない。

ハルハ・モンゴル語 ダグル語

主格	am	am	「口が」
属格	amni	} amī	「口の」
対格	amig		「口を」
与・位格	amānd	amd	「口に」
奪格	amnās	amās	「口から」
造格	amār	amār	「口で」
共同格	amtaē	amtī	「口と」

2) 名詞類の格変化(曲用)で、属格形と対格形の語尾が融合して、同形となっている。

ただし、人称代名詞の単数形の格変化では、語幹形が交替するため、両形の区別が保たれている。

第1人称 第2人称 第3人称

主格	bī	「私は」	ši	「君は」	in	「彼は」
属格	mini	「私の」	šini	「君の」	ini	「彼の」
対格	namī	「私を」	šamī	「君を」	jamī	「彼を」

3) 人称代名詞および人称所属語尾の第1人称複数形に、排除形と包括形の区別がある。

4) 動詞時制形や、補語となる名詞、形容詞、形動詞等につく述語人称語尾がある。

[音韻]

1) 母音 母音には、短母音と長母音の対立がある。短母音は、i, e, a, o, u, および、中舌母音 ə の6つからなる体系をなす。それらの調音的な位置関係は、表1のとおりである。

長母音は、それぞれの短母音に対応する、ī, ē, ā, ō, ū, ē に加えて、もっぱら中国語からの借用語に現われる ū (長母音のみ) がある。

二重母音には、i, u が副母音となる下降二重母音 ai, oi, ui, ei; au, eu と、y が副母音となる上昇二重母音 ya, ye がある。上昇二重母音は、借用語にしか現われない。

〈表1〉 ダグル語の母音体系

	前舌	中舌	後舌
	非	円唇	唇
狭	i		u
半狭	e	ə	
半広			o
広		a	

yanšye <中国語 元帥 (yuánshuài)

強勢は、常に第1音節の母音におかれ、第1音節の母音は強く、明瞭に発音される。これに関連して、第2音節以降では母音の調音が弛緩し、特に、短母音が弱化した発音となる。

2) 子音 子音には、p, t, k; b, d, g; s, š, x; tš, dž; w, j, r, l; m, n, および、借用語にのみ用いられる摩擦音の f と、捲舌音の š, ž, tš, dž (IPA の表記では、それぞれ [s, ʒ, tʃ, dʒ]) がある。

n は、子音 k, g の前では軟口蓋音の [ŋ] として現われ、それ以外の位置では歯茎音の [n] である。なお、借用語の発音には、上記以外の位置に [ŋ] が現われることがある。

破裂音と破擦音の2つの系列、p, t, k, tš, (tš') と b, d, g, dž, (dž) は、無声有気音 [p', t', k', tʃ', (tʃ')] と無声無気音 [p, t, k, tʃ, (tʃ)]、もしくは、b, d, g, dž, (dž) として現われる。

š は、IPA では [ʃ] である。

また、b と g は、語中、語末では、通例、摩擦音 [w, ɣ] として発音される。

注意すべき現象として、子音の口蓋化と円唇化の現象がある。つまり、一連の子音は、上記の通常の発音に加えて、口蓋化音と円唇化音の、計3つの系列を有する。本項では、「子音字+ɰ」で口蓋化子音を、「子音字+w」で円唇化子音を表わす。たとえば、b, d, g [p, t, k] に対して、口蓋化音の系列を bj, dj, gj [p̠, t̠, k̠], 円唇化音の系列を bw, dw, gw [pʷ, tʷ, kʷ] のように表わす。

ただし、母音 i, e の直前の子音は、常に口蓋化子音であり、母音 o, u の直前の子音は、常に円唇化子音であり、それらには、特別 j, w の符号を付けない。

それぞれの子音に対する、口蓋化音、円唇化音の関係は、表2のとおりである。

mjag [maj] 「肉」, dwatər [tʷat'ər] 「内、中」

3) 母音調和 1語中に含まれる母音には、共起の制限がある。この制限は接尾辞にも及び、一連の接尾辞では、それが接尾する語幹の母音に従って、ā~ō もしくは ā~ō~ō~ē という母音の交替がある。接尾

〈表 2〉 子音の口蓋化と円唇化

p	t	k; b	d	g; s	x;
pj	tj	kj; bj	dj	gj;	š xj;
	tw	kw; bw	dw	gw; sw	šw xw;
;					
		r	l;	m	n
tš	dž	j	rj	lj;	mj nj
tšw	džw;	w	lw;	mw	nw

〈表 3〉 ダグル語の接尾辞における母音の交替

語幹の第1音節の母音				接尾辞の母音交替		
				4種交替	2種交替	
a 類	a	ā	au	ai	ā注)	ā
	e	ē				
o 類	o	ō		oi	ō	
ə 類	ə	ē	əu	əi	ə	ē
	i	ī				
	u	ū		ui		
語幹の母音にかかわらず、語幹末が口蓋化子音 (š, tš, dž を含む)、または i の場合				ē		

注：a 類の母音をもつ語幹が円唇化音で終わる場合には、ē が現われる。

辞における母音交替の条件をまとめると、表3のようになる。

以下、ā~ō~ə~ē の母音交替を ā', ā~ē の交替を ā² のように表わす。たとえば、「~から、~より」の意味をもつ奪格語尾は、長母音、二重母音に終わる語幹には -jās², それ以外の語幹には -ās¹ という形が付く。

- ag 「兄」 — agās 「兄から」
- nogw 「犬」 — nogōs 「犬から」
- əg 「母」 — əgōs 「母から」
- gerj 「家」 — gerēs 「家から」;
- atšā 「父」 — atšājās 「父から」
- dəu 「弟」 — dəujās 「弟から」

4) 語形変化に際しての語幹の交替 文法的、派生的な語形変化は、一般に、一定の語幹に種々の接尾辞が付くことによって実現される。語形変化に際して、語幹は比較的安定しているが、人称代名詞では、格変化に際して、語幹の交替がみられる。たとえば、

第1人称単数：bī~min~nam-(~nā-)

語形変化に際して、語幹末音節の非強勢短母音は、長母音ではじまる接尾辞が付く際に脱落する。

xaləg 「掌」 + ār — xalgār 「掌で」

tərag 「車」 + ər — tərgār 「車で」

口蓋化子音で終わる語幹は、子音ではじまる接尾辞が付く際に、接尾辞との間に母音 i が挿入され、同様に、円唇化子音で終わる語幹は、子音ではじまる接尾辞が付く際に、接尾辞との間に母音 u が挿入される。

morj 「馬」 + tī — moritī 「馬をもった」

ogw 「脳」 + d — ogud 「脳に」

〔形態〕 名詞類の主要な文法的語形変化としては、1) 複数, 2) 曲用, 3) 所属, の3種類がある。

1) 複数語尾 -sul, -nur, -r これらのうち -sul は、もっとも一般的な複数語尾である。

morj 「馬」 — morisul 「馬 (複数)」

ilgā 「花」 — ilgāsul 「花々」

人を表わす語に、-nur, -r という語尾が付くことがある (-r が接尾する際、語幹末の n は脱落する)。

gutš 「同志」 — gutšnur 「同志たち」

ujin 「娘」 — ujir 「娘たち」

複数形は、一般に、数詞や, barān 「多くの」、walən 「多数の」等の数量詞とともに用いられない。

2) 曲用語尾 (カッコ内の形は、長母音、二重母音に終わる語幹に付く)

格	語尾	例	
主 格	-φ(ゼロ)	xukur 「牛が」	akā 「兄が」
属・対格	-i(-ji)	xukrī 「牛の、牛を」	akāji 「兄の、兄を」
与・位格	-d	xukurd 「牛に」	akād 「兄に」
奪 格	-ās¹(-jās²)	xukrōs 「牛から」	akājās 「兄から」
造 格	-ār¹(-jār²)	xukrōr 「牛で」	akājār 「兄で」
共同格	-tī	xukurtī 「牛と」	akātī 「兄と」
程度格	-tšār²	murtšōr 「肩まで」	

なお、奪格形語尾には、-ās¹(-jās²) とならんで、造格形語尾と同形の -ār¹(-jār²) も用いられる。

3) 所属関係には、a) 再帰所属と、b) 人称所属、がある。

a) 再帰所属語尾 -ā¹(-jā²) 名詞の斜格形に付いて、所与の人や物が、当該の文の主語に所属することを表わす。「自分(自身)の」と訳しうる。

atšā 「父」 + jāš (奪格) + ā (再帰所属) — atšājāsā 「自分の父から」

この語尾に、さらに、-munō 「自分の」という語尾が付いて、再帰所属関係が強調されることがある。

b) 人称所属語尾は、次の語尾によって、「私の」「君の」等々の所属、所有関係を表わす。

単数	複数	
	包括形	排除形
第1人称	-minj	-nānj -mānj
第2人称	-šinj	-tānj
第3人称	-inj(-jinj)	-inānj(-jinānj)

(カッコ内の形は、二重母音に終わる語幹につく)

名詞類に付く接尾辞の接続順序は、

語幹＋複数語尾＋曲用語尾＋ $\left\{ \begin{array}{l} \text{再帰所属語尾} \\ \text{人称所属語尾} \end{array} \right\}$

となる。

gutš「同志」＋nur(複数)＋tī(共同格)＋jə

(再帰所属)－gutšnurtijə「自分の同志たちと」

人称代名詞は、格変化に際して語幹の交替があり、さらに、単数1・2人称では、形態上、属格形と対格形を区別する点で、一般の名詞類と異なる。人称代名詞の語幹交替は、表4のとおりである。

〈表4〉 格変化における人称代名詞の語幹交替

		第1人称	第2人称	第3人称	
単数	主格	bī	šī	in	
	属格	min-	šin-	in-	
	与・位格	nā-~nam-	} sam-	} jam-	
	その他の格	nam-			
		第1人称	第2人称	第3人称	
		包括形	排除形		
複数	主格	bed	bā	tā	ān
	斜格	bedən-	mān-	tān-	ān-

指示代名詞には、近称と遠称の2つの系列がある。これらは、人称代名詞の第3人称(「彼」「彼ら」として用いられることがある。

単数(近称) ənə「これ」(遠称) tər「あれ」

複数 əd「これら」 təd「あれら」

əd, təd は、斜格形で ədən-, tədən- という語幹をもち、tər は与・位格で tərən-~tən-, 共同格で tərən- という語幹をもつ。

基本数詞は、次の通りである。

nək「1」, xoir「2」, gwareb「3」, durubw「4」, tāwu「5」, džirgō「6」, dolō「7」, naim「8」, is「9」, xarəb「10」, xorj「20」, gotš「30」, dutš「40」, tabj「50」, džar「60」, dal「70」, naj「80」, jər「90」, džau「100」, mjaŋ-gə「1,000」, tum「10,000」

合成数詞や名詞の修飾語となるときは、語末に -ən ~-in の付いた形が用いられる。

xarbən udur「10日」, xorin is「29」

動詞の活用は、1) 命令形、2) 終止形、3) 形動

詞形、4) 副動詞形、の4類に大別される。

1) 命令形としてまとめたものには、話し手が他者に行為を指令する、純粋な「命令形」のほか、話し手の意志、勧誘を表わす「意志形」、行為の遂行を遅らせる(「あとで~する」)ことを表わす「遅延形」も含まれる。

命令形には、次のような種類がある。

種類	主語の 人称と数	語尾	例
命令	2単	-φ(ゼロ)	jau「行け」
	2複	-tu	jau-tu「行け」
	3(単, 複)	-tgai	jau-tgai「行くがいい」
意志	1(単, 複)	-jā	jau-jā「行こう」
遅延	1~3	-gān ² + 人称所属語尾	

遅延形の例は、次のとおりである。

主語の人称と数 例

1単	jau-gān-minj	「あとで行こう」
1複(incl.)	jau-gān-nānj	「あとで行こう」
1複(excl.)	jau-gān-mānj	「あとで行こう」
2単	jau-gān-šinj	「あとで行きなさい」
2複	jau-gān-tānj	「あとで行きなさい」
3単	jau-gān-inj	「あとで行くがいい」
3複	jau-gān-ānj	「あとで行くがいい」

なお、第2人称には、単数形に jau-gān-ē、複数形に jau-gān-tē という形もあり、上に掲げた形とともに用いられる。また、第3人称単数では、最後の -inj は長母音となっている。

2) 終止形

種類	語尾	例
過去(1)	-sən	jau-sən「行った」
過去(2)	-lā	jau-lā「行った」
現在・未来(1)	-bei	jau-bəj「行く」
現在・未来(2)	-n	jau-n「行く」

過去形(1)と現在・未来形(1)は、時制を表わす一般的な形である。これに対して、過去形(2)と現在・未来形(2)は、韻文中によく用いられる。

種類	語尾	例
完了	-sən	jau-sən「行った~」
予定	-gu	jau-gu「行く~」
行為主	-ātš'	jaw-ōtš「行く(人)」
可能性	-mājār	jau-mājār「行ける~」

3) 形動詞形は、名詞類を修飾するほか、「~する(した)こと」の意味の名詞となって格変化する。また、終止形と同様、述語として文を終止させるはたつきもある。

4) 副動詞は、副詞的なはたつきをもった動詞形である。単独で他の動詞を修飾するほか、他の語句を支配して、副詞句、副詞節の述語となり、主文に連なる

はたらきがある。

種類	語尾	例
連合	-n	jau-n 「行き、…」
並列	-dž	jau-dž 「行って、…」
分離	-ā(r) ⁴	jaw-ō(r) 「行って(から)…」
継続	-(r)sār ²	jau-(r)sār 「行き続けて…」
条件	-ās ⁴	jaw-ōs 「行けば…」
譲歩	-tgaitš(ig)	jau-tgaitš(ig) 「行っても…」
	-jēš	jau-jēš 「行っても…」
限界	-təl	jau-təl 「行くまで…」
	-tlā ² nē	jau-tlānē 「行くまで…」
即刻	-m(kī)	jau-m(kī) 「行くや否や…」
随伴	-götör	
	~guštör	jau-götör 「行くとすぐ…」
目的	-gā ² nē	jau-gānē 「行くために…」
接近	-māk ² (ən)	jau-māk(ən)
	~mār ²	「(まさに)行くばかりに…」

ダグル語には、述語に付く人称語尾がある。これは、動詞の終止形、形動詞形、および名詞類に付く語尾で、しばしば人称代名詞の主語とともに用いられる。

	単数	複数	
		包括形	排除形
第1人称	-bi(-mi, -wəi)	-dā	-bā(-wā)
第2人称	-ši		-tā
第3人称			-sul

例) bi idsən-bi. 「私は食べた」
ši idən-ši. 「君は食べる」

bā idsən-bā. 「私たち(excl.)は食べた」
bed idsən-dā. 「私たち(incl.)は食べた」
tā gub batur-tā. 「あなた方は皆英雄だ」

動詞の現在・未来形語尾(-bei)と、述語人称語尾との結びつきは特殊で、次のような形となる。

	単数	複数	
		包括形	排除形
第1人称	-wəi(-w)	-bdā	wā
第2人称	-bəiši(-bši)	-bəitā(-btā)	
第3人称		-sul	

動詞の態(voice)には、使役、受動、相互の3種があり、それぞれ、動詞語幹に、次の接尾辞が付いて表わされる。

- 1) 使役態: -lgā², -gā², -kā²
udž-「見る」— udžlgā-「見せる」
sor-「学ぶ」— sorgā-「教える」
- 2) 受動態: -rd-
udž-「見る」— udžird-「見られる」
orj-「呼ぶ」— orird-「呼ばれる」
- 3) 相互態: -ltš-
udž-「見る」— udžiltš-「見合う」
tanj-「知る」— taniltš-「知り合う」

【統 辞】 語順は、日本語のそれにきわめて近い。修飾語は、被修飾語の前におかれ、主語、目的語、補語は、述語動詞の前に位置する。前置詞はなく、後置詞を用いる。

nək udur ənə kək w gja-d itš-ər nək
ある 日 この 息子は 町へ 行って 1頭の
lwəs au-sən.
ラバを 買った
nau-ī dwatər barān džaus bei.
湖の 中に たくさんの 魚が いる

形動詞は、形容詞節をつかって名詞類を修飾するほか、「～する(した)こと」という意味の名詞節をつくるはたらきをもつ。また、副動詞には、副詞節をつくるはたらきがある。

šinī au-sən xū-šinj saikən.
君の 娶った 人は←君の 美しい
əl-sən-d-šinj gertšti.
言ったことに←君の 根拠がある
argi məkətəl ō-gās, bej-ī bar-bəi.
酒を 過度に 飲めば 身体を こわす

否定表現をみると、動詞の命令形の前には bū を付けて禁止を表わし、他の活用形では、直前に ul, əs をおいて否定を表わす。ul は、現在、未来時制の活用形とともに、əs は、過去、完了の活用形とともに用いられる。

ši namī bū dag.
君は 私を [禁止] 従え
「あとについてくるな!」
tər ul onu-n
彼は [否定] 馬に乗る
「彼は馬に乗らない」
əs məd-sən-ši jə?
[否定] 知っていた←君は [疑問]
「君は知らなかったのか?」

否定詞としては、ほかに、uwei「ない、～でない」、bišin「～でない」、udən「まだ～ない」があるが、これらは、否定する語のあとにおかれる。

bī badā id-sən uwai-bī.
 私は 飯を 食べた [否定]←私は
 「私は食事をしなかった」
 tər mōd bišin.
 あれは 木だ [否定]
 「あれは木でない」
 xəin xəisə-gu udən.
 風が 吹く [否定]
 「風はまだ吹かない」

【語彙】 ダグル語の語彙には、他のモンゴル諸言語にはみられない独特の単語が散見する。

saur「犁」, basort「腎臓」, guskō「狼」, katā「塩」, twaltšig「膝」, balkw-「(目を)閉じる」, anēkē「客人」, mək「乳房」, babəg「拳」, kakrā「鶏」, warkəl「衣服」, kasō「鉄」, ogw「脳」, tšaudur「霜」, əl-「話す」, など。

こうしたダグル語特有の語彙の中には、『至元訳語』『華夷訳語』『元朝秘史』等の古文獻に見いだされる、古語の残存形と見なしうるものがある。

nadžir「夏」, sorbj「杖」, xəkj「頭」, ontš「刀」, xonj「煙」, tergul「道」, など。

また、次のように、他のモンゴル諸言語と同系と思われるが、対応が部分的で、独特の音形をもつものも少なくない。

蒙古文語形	ダグル語	
kümün	xū	「人」
yeke	xig	「大きい」
kimusu(n)	kimtš	「爪」
isgej	šidəg	「フェルト」
γutul	gotšör	「靴」
uruγul	xollə	「唇」
jiyasu(n)	džaus	「魚」

借用語で目立つのは、満州語に由来するものである。

ilgā「花」(<ilha), bait「こと、事情」(<baita), džak「物」(<jaka)

同様に、中国語からの借用語の占める割合も大きく、それによって、一連の捲舌子音 \tilde{z} , $\tilde{tʃ}$, $\tilde{dʒ}$, が生じるに至った。

gjä「街」(<街 jiē), tšəqžan「駅」(<車站 chēzhàn), danwəi「党委員会」(<党委 dǎng-wěi)

【参考文献】

仲素純(1965), 「達斡爾語概況」『中国語文』第4期(中国社会科学院出版社, 北京)

——(1982), 『達斡爾語簡志』(中国少数民族語言簡志叢書, 民族出版社, 北京)

恩和巴圖(1983a), 「達斡爾語記音符号」『内蒙古大学学报, 哲学社会科学版』第3期(呼和浩特)

——(1983b), 『達漢小詞典』(内蒙古人民出版社, 呼和浩特)

——(1988), 『達斡爾語讀本』(内蒙古教育出版社, 呼和浩特)

恩和巴圖等編(1984), 『達斡爾語詞彙』(蒙古語族語言方言研究叢書005, 内蒙古人民出版社)

——(1985), 『達斡爾語話語材料』(蒙古語族語言方言研究叢書006)

恩和巴圖編著(1988), 『達斡爾語和蒙古語』(蒙古語族語言方言研究叢書004)

Kałuyźński, St., “Dagurisches Wörterverzeichnis”, *Rocznik Orientalistyczny* 33(1) (1969), 33(2) (1970)

Martin, S. E. (1961), *Dagur Mongolian Grammar, Texts, and Lexicon* (Based on the Speech of Peter Onon) (Indiana University Publications, Uralic and Altaic Series, Vol. 4, Mouton, The Hague)

Poppe, N. (1934), “Über die Sprache der Daguren”, *Asia Major* X (Leipzig)

——(1964), “Die dagurische Sprache”, *Handbuch der Orientalistik*, I Abt., V Band, II Abschnitt: *Mongolistik* (E. J. Brill, Leiden/Köln)

Поппе, Н. Н. (1930), *Дагурское наречие* (Издательство АН СССР, Ленинград)

Тодаева, Б. Х. (1960), “Дагурский язык”, *Монгольские языки и диалекты Китая* (Издательство восточной литературы, Москва)

——(1986), *Дагурский язык* (Наука, Москва)

Namcarai, Qaserdeni (1983), *Daγur kele mongγul kelen-ü qaricaγulal* (『ダグル語と蒙古語の比較』) (内蒙古人民出版社)

【参照】 モンゴル諸語

(栗林 均)